

鈴木広の社会学 その1：鈴木社会学の概要

— 九州大学文学部社会学研究室の窓から Part 2 —

三浦典子

1 はじめに：内藤莞爾と鈴木広

2021年に『内藤莞爾の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』（学文社）を上梓した。同書は、『やまぐち地域社会研究』に4年間にわたって連載した「内藤莞爾の社会学」¹⁾を一冊に集約したものであり、筆者が14年半在籍した、九州大学文学部の社会学研究室において社会学を学んだ観点から、内藤莞爾先生の社会学の全体像を明らかにしたものである。

その14年半の間、鈴木広先生は、内藤先生のもとで助教授を務められ、社会学研究室は、内藤教授と鈴木助教授とのコンビ、プラス助手によって構成される小講座体制で運営されていた。この体制は、鈴木先生が東北大学から九州大学に着任された昭和34年から、内藤先生が九州大学を定年退職される昭和55年までの、およそ20年間の長きにわたって続いた、ある意味では安定した研究室体制であったといえる。

小講座体制は、何と云っても教授が中心で、助教授や助手、さらには大学院生が教授の教育研究を支えるという構図になっていた。しかしながら、学生の中から見れば、2人の先生は、お互いの領分を邪魔しないように、それぞれが独自の道を歩んでおられたという印象が強い。

そして、内藤先生は末子相続の研究を、鈴木先生は都市社会の研究を、それぞれ研究室の助手や大学院生、学部学生を取り込んで進めておられたように思う。内藤先生の末子相続の調査研究は、助手、大学院生と他大学に就職していった研究者が主に担って、ある程度閉鎖的な集団で行われており、鈴木先生はその輪には入っておられなかった。

福岡県大川市で実施された「零細企業集団型都市の研究」は、昭和35・36年度の文部省科学研究費による共同研究であり、九州大学に着任された鈴木先生は、分担者として参加された研究である。その調査研究には、助手と大学院生が参加して論文を共同執筆しているが、共同研究の代表者は内藤莞爾教授で、昭和36年秋に京都大学で開催された日本社会学会では、代表者として内藤先生も成果発表に加わっておられる。社会学評論に掲載された論文の序言には、「本研究をたえず鞭撻された内藤莞爾教授」²⁾と、内藤先生に感謝が述べられている。

翌7年の、鈴木先生が行われた「創価学会調査」は、やはり「近代都市の構造分析」をテーマとした文部省科学研究費による共同研究の一部で、社会学研究室の大学院生や学生が質問票の作成から集計に至る全作業を受け持っている。この調査研究には、九州大学教養部の斎藤文男助教授（憲法学）と原田溥助教授（経済学）が協力されている。

内藤先生の調査研究への協力体制は文学部の社会学研究室が主たるものとなっていた

が、鈴木先生は、教養部で社会学の講義を受け持っておられた関係もあり、調査研究のネットワークは教養部にまで広がっていたようである。筆者も、教養部の社会学を含む社会科学研究分野の先生方とはいろいろな交流を行ってきたが、文学部と教養部の研究風土は大きく異なっていた。教養部においては、社会科学研究事務室を拠点に、社会科学系の先生方が学問分野横断的な付き合いをなされており、自由な雰囲気があった。

いずれにせよ、社会学を学ぶわれわれ学生たちは、内藤先生と鈴木先生の2人の先生のそれぞれの調査研究に参加できる環境にあったことは事実である。また、2人の先生は、研究スタイルだけでなく、講義スタイルも対照的であった。内藤先生の講義は、始業時間とともに始まり、「今日はここまで」などと言われ、いつも早めに終わっていた。それに対して鈴木先生の講義は、時間通りに始まったことはない。当時の時間割は1コマ2時間で、かなりの長丁場であった。そして、授業の開始時間から30分経っても先生が教室に来られなければ、「自然休講」となるという、なんとも暢気なものであった。

鈴木先生の授業は、「今日は休講かな」と思い始めたころに、やおら教室に入っこれられ、小さな声でぼそぼそと話し始められる。今にして思えば、講義の内容は深いものがあったとは思いますが、前の方の席に座らなければ、すべて聞き取ることが難しかった。そして時折、一人で含み笑いをされるが、何で笑っておられるのか不明である。長年講義を聴き続けていると、その含み笑いが何を意味しているのかが分かってきて、講義はより面白いものになるのであるが、1、2年ではなかなかその域にまでは達しない。さらに悪いことに、遅れてきたことによって、準備してきた講義内容をすべて話し切れないのか、終了のベルが鳴っても講義は続くことが多かった。お昼前の授業の場合は、「食堂がいっぱいになるのに」という心配もあった。学生にとっては、不親切な講義であったように思う。

この2人の先生の講義スタイルから、筆者は、始業時間とともに講義を始め、大きな声で学生に意図が伝わるように話し、終了時間にはきちんと話し終えることを学んだ。

ところで、2人の先生がコンビを組んで進められた仕事として、教科書の出版がある。『社会学——基礎理論と分析——』（誠信書房）は、「社会分析研究会」編で1965（昭和40）年に出版されている。「社会分析研究会」は、「西部社会学会」に所属する研究者から構成されている。「西部社会学会」の会長には、九州大学文学部の教授が代々就任してきていることから、「社会分析研究会」の代表者は内藤先生であることが推察される。

はしがきに、誠信書房への謝意とともに、「研究会がわで、編集・連絡・校正・索引作成など、編集の実務を受け持ってくれた鈴木広氏に対して」謝意が表されている³⁾。また、校正と索引作成については、九州大学社会学研究室内の助手、大学院生が協力している。

1967（昭和42）年にも、「社会分析研究会」によって、教科書『現代社会学講義』が誠信書房から出版されており、同書にも「鈴木広氏が編集、校正その他一切を担当してくれた」と、謝意が表されている⁴⁾。

これらの教科書の出版は、当時の文学部が小講座制で運営されていたことから、内藤教授と鈴木助教授がタグを組んで進められた仕事であったことは明白であり、内藤教授は代

表者として、実質的には、鈴木助教授が編集者として任務を果たしてこられたようである。後に、鈴木先生が名編集者と言われることになるのは、ここから始まっていたといえる。

九州大学文学部社会学研究室では、内藤先生と鈴木先生の双方から学べる環境があり、自らの社会学を自己分析するためには、両者の社会学を解明する必要がある。本論は、『内藤莞爾の社会学』に次いで、「鈴木広の社会学」について考察を進めていくものである。

2 鈴木広の人となりと研究概要

2.1 鈴木広自身が語る自画像

鈴木広先生は、1931（昭和6）年3月6日に北海道函館市で生まれ、2014（平成26）年11月13日に福岡市で亡くなられた。東北大学で社会学を学び、九州大学で35年間、久留米大学で12年間在職し、教育研究に従事し、数々の研究業績を積み上げられた。

まず最初に、鈴木広先生自身が執筆されたプロフィール⁵⁾から、鈴木先生の研究概要や研究状況、および人となりを示してみたい。

鈴木広 1931年3月6日 函館市生まれ。

旧制弘前高校から東北大学文学部卒。新明正道門下。

はじめ、Mannheim, MacIver, Malinowski, Merton, Parsonsらの学説研究に従事。のち、「釜石調査」をへて、都市社会学に方向転換。理論と実証の総合を志向する「中範囲の理論」づくりに専念。

1978年刊の『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』で、日本都市学会奥井賞を獲得。1969年以来、社会移動研究会を主宰。

日本社会学会、九州都市学会、西日本社会学会の理事、評議員をはじめ、県、市の多くの審議会などで専門委員となり、多忙の極。

今も、締め切りを過ぎた原稿7本をかかえ、七転八倒の有様。その割に心労で痩せないのが不思議です。

毎週2回、夏冬を問わずプールで1時間ずつ（約1000m）泳ぐのを、よほどのことがない限り続けている。今や、立泳、横泳、平泳、クロール、拔手、バタフライ、潜水、背泳と、自由自在。

小学校、中学校、高校とボーイソプラノでしたが、いつの間にかテノールになり、時々、気が向いたとき、主にドイツ・リートをひそかに楽しむ。人前では、ほとんど歌わない。芸術を解する人がマレなので。最近、練習しているのは「平城山」。誰かピアノ伴奏してくれる人はいませんか。

テレビを見ないかわりに、映画をたまにみる。最近よかったものでは、「惑星ソラリス」が最高。「かつこうの巣の上で」「宿命」もわるくないが、「ディア・ハンター」「帰郷」となると、やや落ちる。

いつも研究室を最大限に利用しています（学内電話 5122）。

(嫌いなもの) ケチな男。小利口な才子。「共同」する能力もないのに、社会学をやろうなどとするエゴイスト。「巧言令色」な男女。自惚れて威張るやつ。成り上がり根性。

(好きなもの) 骨身を惜しまず努力するけなげな人、1を聞いて10を知るような、あるいは打てば響くような人。共同のためにエゴを多少抑制する能力のある人。大食しない人。古い友人。

研究経歴や研究内容については、これから詳しく述べていくことになるが、「いつも研究室を最大限に利用しています」とあるように、鈴木先生はよほどのことがない限り、朝、大学に来られ、夕方まで研究室で仕事をしておられた。内藤先生が、授業と会議があるときにだけ大学研究室におられるのと対照的であった。

社会学の先生方の研究室は、助手や大学院生が勉強している部屋のひとつおいた隣にあり、廊下は続いているが、教官研究室との間には扉があった。かつては、先生方の研究室を訪問する時には、あらかじめ電話をして扉を開けてもらわなければならなかったらしいが、われわれの時代には、この扉は開いたままになっていた。したがって、先生方の動向はよくわかり、「若輩者は先生よりは長時間勉強しなければならない」と勝手に決め込んで、鈴木先生が帰宅されることを確認するまでは、研究室で勉強することになっていた。

2.2 鈴木広の研究経歴の概要

表1は、鈴木広先生の大学卒業以降の研究経歴と、学会活動の参加状況の概要を示したものである。

表1 鈴木広の研究経歴と学会活動

年次	研究経歴	学会活動
1953	東北大学文学部社会学科（新制）卒業	日本社会学会入会・東北社会学研究会入会
1955	東北大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了	村落研究会入会
1955	東北大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程進学	
1958	東北大学文学部助手	
1959	九州大学文学部講師	日本都市学会（九州都市学会）・西部社会学会（のち西日本社会学会）入会
1963	九州大学文学部助教授	
1966		九州大学社会学会設立
1970	ブルガリア・イギリス・アメリカ在外研究（～1971）	
1980	九州大学文学部教授	
1981		日本都市社会学会設立 初代会長
1985		社会分析学会 初代会長（～2010）
1988		日本地域福祉学会入会
1990		環境社会学研究会（環境社会学会）入会
1994	九州大学定年退職 4月名誉教授	
1994	久留米大学文学部教授	
2001	久留米大学定年退職 特任教授	
2003		福祉社会学会入会
2006	久留米大学比較文化研究所客員教授（～2013）	

鈴木先生は、東北大学文学部で社会学を専攻し、卒業後、大学院に進学した1953（昭和28）年に、東北社会学研究会と社会学の全国学会である日本社会学会に入会している。また、修士課程を修了する際に、漁村調査や農村調査など地域研究を研究分野としてきたことから、村落社会研究会にも入会している。

1959（昭和34）年に、東北大学の助手を経て、九州大学に講師で着任した際に、東北大学で新明正道先生を中心とした産業都市釜石市の共同調査研究に参加したことから、都市にも研究分野を広げ、九州都市学会と日本都市学会に入会している。現在でも、全国学会である日本都市学会はそれぞれの地域学会の上位組織として位置づけられており、2つの学会には同時に入会する仕組みとなっている。

当時、都市を研究するものが参加する学会は都市学会があるのみで、この学会は、社会学のみならず、その他の社会科学から都市工学の研究者まで幅広い研究者を含み、さらに自治体関係者も参加する、ある意味ではユニークな学際的な学会であり、利点もあれば弱点もあった。

鈴木先生は、長らくこの都市学会に参加しておられたが、社会学に特化した学会を設立することを望んでおられ、都市社会学を研究分野としている全国の研究者に参加を呼びかけられ、1981（昭和56）年に日本都市社会学会が設立された。学会設立後、鈴木先生が初代の学会長に就任され、筆者は、この学会の設立のための準備段階から手伝いをしてきたことから、初代の事務局長を務めた。この学会の設立は、日本都市学会に積極的にかかわっていた都市社会学者からは、「分裂行動」として白い目で見られがちであったが、学会活動を進めていく中で、やがてそのわだかまりは解けていった。

また、1959（昭和34）年に、九州に来られると同時に、「西部社会学会」にも入会されている。「西部社会学会」は、第2次世界大戦後、日本社会学会よりもいち早く1946年に学会活動を再開し、その後名称を「西日本社会学会」と変更している。前述したように、学会長は、代々九州大学の文学部社会学研究室の教授が務めてきた。

世界的な大学紛争の潮流の中で、1970（昭和45）年の西部社会学会大会の折に、そのことに対する不満が表面化し、学会長であった内藤先生はそれに立腹され、退会届を学会事務局に送付された。その当時、筆者は社会学研究室の助手を務めており、西日本社会学会の事務局を預かっていた。内藤先生から送られた退会届は私の手元に届き、これをどこに持って行って、どうすればいいのか苦慮した。

次年度の大会で、島根大学の山岡栄一教授が西日本社会学会長に就任され、事務局を島根大学に移していただいた。次いで、福岡大学の近沢栄一教授が学会長に就任され、事務局は福岡大学に移り、その後、鈴木広先生が学会長に就かれた時に、事務局は再び九州大学にもどってきて今日に至っている。

また、社会学研究室においては、卒業前に病気で急逝した学生の家族から寄せられた「北川基金」をもとに、1966（昭和41）年に、九州大学社会学研究室同窓会を基盤とした「九州大学社会学会」が設立され、内藤莞爾教授が会長に就任された。この学会は、内藤先生

の定年退職後、教授に就任された鈴木広先生が学会長となった。鈴木先生は、同窓会と学会とが重なった状態から、1985（昭和60）年3月に、同窓会と社会学会を分離して、学術研究に特化した「社会分析学会」を設立された。さらに九州大学という枠を超えた、全国的な学会にすることを目論んで、1996（平成8）年に、学会名を「日本社会分析学会」に変更し、この学会の会長を2010年まで務められた⁶⁾。

以上みてきたように、鈴木広の研究経歴の概観から、鈴木が、「社会学」を社会科学のなかで独立した学問分野として確立しようとしてきた意欲と、その底にある「社会学」に対する強い思いを感じることができる。そして、その目的をある程度遂げた後は、地域福祉や環境問題といった社会的な課題解決のために、社会学を応用しようとした研究形跡をみることができる。

3 鈴木広の社会学の変遷と特徴

3.1 鈴木社会学の時期的区分と重要な研究業績

鈴木広の社会学は大きく分けて、(1)卒業論文を執筆した1953年から、初期の論文をまとめた『都市的世界』を出版された1970年までの、社会学の理論的問題関心が成熟していった時期、(2)理論から実証へ研究スタイルを移行していった時期、具体的には、社会移動を焦点に都市化と社会変動に関する実証的研究が進められ、その総括としての『都市化の研究』（1986年）の刊行まで、(3)人間活動の諸結果によって引き起こされた自然環境の破壊や社会関係の分断を修復すべく、地域福祉活動などの実践を模索する時期、の3つの時期に分けることができよう。

それぞれの時期の、特記すべき問題関心は以下のとおりである。また、それぞれの時期の重要な研究業績を、*以降に記している。

第1期 1953年～1965年

社会学への理論的問題関心の追求

都市研究および社会移動研究の理論的枠組みの考察

土着社会の流動化と態度変容

*1953年 卒業論文「共同体論」

1957年 「イデオロギーとウトピーの構成概念について」『社会学評論』8号1巻

1959年 「分析図式」『産業都市の構造分析』博士論文「都市研究における基本概念」

1965年 C. W. ミルズ翻訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店

1965年 訳編『都市化の社会学』誠信書房

1970年 総括としての論文集『都市的世界』誠信書房

第2期 1965年～1986年

都市化とコミュニティの分析枠組み

都市化と生活構造

余暇、スポーツ、生きがい

現代社会学会議設立（1974年）『現代社会学』（講談社、1984よりアカデミア出版会）

日本都市社会学会設立（1981年）

* 1968年 社会移動論序説

1969年 S. M. リプセット・R. ベンディックス、翻訳『産業都市の構造——社会移動の比較分析——』サイマル出版

1978年 編著『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会

1986年 総括としての論文集『都市化の研究』恒星社厚生閣

第3期 1986年以降

ボランティア行為の福祉社会学

地域福祉社会への実践（福岡県地域福祉振興基金会）

環境社会学

災害都市の研究

* 1995年 方法としての環境社会学

1997年 『都市＝環境パラダイムの構築と市民参加』久留米大学文学部

1998年 編著『災害都市の研究——島原市と普賢岳——』九州大学出版会

3.2 研究時期ごとの研究業績の概要

鈴木先生は、東北大学文学部において、英語が得意であったので英文学に進むことも考えられたようであるが、結局、社会学を専攻された。社会学の主任教授は新明正道であったが、新明先生は、戦後の占領軍司令部による公職追放のため不在であった。運よく、鈴木先生が社会学の専門課程に進学する時に大学にもどってこられ、学部2年、大学院5年、助手1年の8年間、新明先生から指導を受けられた。鈴木先生は新明先生のまるまるの教え子ということになるとのことである⁷⁾。新明先生が不在の間、宗教学の石津照璽教授が社会学講座を兼任しておられ、鈴木先生は、石津先生の講義は「深みのある講義」で、よく聞いたとのことである。筆者が学部生の時に、石津先生は九州大学文学部に集中講義で来校された。鈴木先生からその講義を受講するように勧められ、聴講したが、ずいぶん難解であった。

ところで、東北大学では、昭和25年5月に、戦後占領軍の民間情報教育局



高等教育顧問のイールズの講演会を流会に追い込んだ、いわゆる東北大学イールズ事件が発生し、鈴木先生も学部時代に、ある程度その事件にかかわったという。その際の、学生運動の様子を撮影した写真の数々が、東北大学のアーカイブ「東北大学史料館」に収録されている。写真はその中の1枚であるが、反対運動に参加している学生の中に、ひょっとすれば鈴木先生の姿を探ることができるかもしれない⁸⁾。

先生は、学部時代、社会科学研究会（社研）に所属しており、マルクス・エンゲルスの文献を読み漁ったとのことである。そして、ブルジョア社会学とマルクス主義との理論論争、すなわち社会学が、どれほどマルクス主義に対抗できるかをテーマに卒業論文に取り組み、社会学においてオーソドックスと考えられていたマッキーバーを取り上げて、「共同体論」の論文を作成された。後に、鈴木先生の指導教官である新明先生が、集中講義で九州大学に来られた折に、講義の中で、鈴木先生の卒業論文について触れられことがあり、「マルクスとマッキーバーを比較するような論文であったが、若干マルクスに分がよかった」と言われていた。

大学院に進学してから、マルクスとの関係で、マンハイムを中心とする知識社会学や、マッキーバーから、コミュニティの実証的研究や機能主義理論について研究を進めていかれるが、その後の研究を大きく方向づけるものが、「釜石調査」である。

東北大学の社会学研究室では、漁村や農村の共同調査とともに、産業都市釜石市の調査が行われ、『産業都市の構造分析』において、先生は「分析枠組み」を分担執筆された。その枠組みは、経済過程、媒介過程、政治過程からなり、マルクスの土台、上部構造という社会構成体に「媒介過程」を置くことによって、媒介過程に特殊社会学的な意味をもたせており、社会学の存在を確立しようとする意図をうかがうことができる。後に、少人数で行われる社会学演習の授業中に、「ノーベル経済学賞はあるが、残念ながら社会学賞はない。もしあれば、自分がとるのに」というようなことを言われたことがある。そこに、自分自身が社会学を背負って立つ自信と覚悟のようなものを感じたことを記憶している。

この時期のミルズの『社会学的想像力』の翻訳は、当時の社会学に対する批判的な現状分析で、パーソンズの **Grand Theory** に与えた「誇大理論」という訳語は、その意を十二分に表現するものである。先生自身も『社会学的想像力』の翻訳は「名訳」だと述べておられた。大学入試の国語の問題に、この訳本が使われたことは、先生にとって自慢で⁹⁾、「国語の試験問題ですよ」と、日本語としても優れた訳本という証拠になることを、よく言っておられた。

また、『都市化の社会学』は、都市社会学に関する主要な文献を収集して翻訳された編訳書であるが、同書は、日本語で都市社会学を学ぶ上でのバイブル的存在となった。得意な英語と名編集者としての、鈴木広の代表的な業績のひとつといえよう。

第2期に入ると、創価学会調査を契機に、問題関心は社会移動が態度に及ぼす影響に及んで、都市の社会学理論の研究から、社会移動を焦点に置いた実証的な地域研究に移行していく。リブセットとベンディックス『産業都市の構造——社会移動の比較分析——』の翻

訳が行われていった時期の鈴木先生の社会学講義は、翻訳作業がそのまま授業に反映されていたことが、出版された翻訳本を見るとよくわかる。

問題関心が都市社会学から社会移動論に移り、「社会移動研究会」を組織して、実質的な調査研究が行われていった。その共同研究の実証的な成果が、鈴木広編著『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』である。同書は、1980年に、日本都市学会賞（奥井記念賞）を受賞することとなり、社会移動研究会のメンバー数名で、高知市で開催された学会大会の授賞式に出席される先生のお供をした。

鈴木先生の「コミュニティの分析枠組み」は、個人の社会的地位と社会構造との連動的変化を示す社会移動と、社会移動によって大きな影響を受ける生活構造を中心に、経済構造も地域環境も取り込んだもので、ここに総合社会的分析枠組みの完成をみることができる。

第3期における『都市＝環境パラダイムの構築と市民参加』や『災害都市の研究』は、まさに、地球規模での今日的課題となっている、人間活動の結果としての地球温暖化問題や、人間活動によってはいかようにも避けがたい自然災害に立ち向かわざるをえない状況を、先取りした研究の成果として位置付けられよう。

鈴木先生の社会現象や社会問題に対する提言は、10年も20年も先取りしており、「僕が最初に言い出した時には、だれも注目しなかったが、10年たった今頃、皆が騒ぎ出している」と、よくこぼしておられた。

1994年に、九州大学を定年で退職され、久留米大学文学部に移られて、晩年、先生は自らの社会学を総括しておられる。それが、2003年「社会学50年の総括と展望（その1）」『久留米大学文学部紀要 情報社会学科編』創刊号と2006年『社会学事始め』（私家本、非売品）、および2007年「社会学50年の総括と展望（その2）」『久留米大学文学部紀要 情報社会学科編』第3号、である。『社会学事始め』は、2006年に、久留米大学の特任教授の期間を終了し、退職を記念する謝恩会へのお礼の品として作成され、出席者にプレゼントされたものである。

4 鈴木社会学の特徴

4.1 優れた翻訳

以上、概観してきた研究成果全体を通じて、鈴木社会学の特徴をあげれば、まず第1に優れた翻訳作業がある。主なものは、

- 1958年 K. マンハイム、鈴木広訳「世代の問題」鈴木広・田野崎昭夫『世代・競争』誠信書房、2-113頁
- 1965年 M. アクセルロッド、鈴木広訳「都市構造と集団参加」鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房、211-221頁
- 1965年 C. W. ミルズ、鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店
- 1969年 S. M. リプセット、鈴木広訳『産業社会の構造——社会的移動の比較分析——』サイマル出版

1972年 S. M. リプセット、鈴木広・千石好郎・篠原隆弘訳『革命と反革命——歴史の断絶と連続性を考察した《国際比較研究》——』サイマル出版
それ以降も、監修して多くの翻訳書を出版しておられる。

4.2 教科書の編集

また、社会学を学ぶものの道標となる教科書や専門別の論文集を数多く編集しておられる。鈴木広が名編集長と言われるゆえんを、ジャンル別に、編集出版年度を追って示してみたい。

【社会学概論】

- 1965年 社会分析研究会編、鈴木広編集担当『社会学——基礎理論と分析——』誠信書房
1967年 社会分析研究会編、鈴木広編集担当『現代社会学講義』誠信書房
1970年 佐藤毅・鈴木広・布施鉄治・細谷昂共編『社会学を学ぶ』有斐閣
1973年 社会分析研究会編、鈴木広編集担当『社会学概論』誠信書房
1975年 鈴木広編『現代社会の人間的状況』アカデミア出版会
1977年 中村正夫・鈴木広編『人間存在の社会学的構造』アカデミア出版会
1980年 鈴木広編『社会理論と社会体制』アカデミア出版会
1986年 社会分析学会編『社会学の現在』恒星社厚生閣
1987年 鈴木広編『現代社会を解説する』ミネルヴァ書房
1993年 鈴木広・木下謙治・友枝敏雄・三隅一人編『社会学と現代社会』恒星社厚生閣

【都市社会学】

- 1984年 鈴木広・倉沢進編『都市社会学』アカデミア出版会
1985年 鈴木広・高橋勇悦・篠原隆弘編『リーディングス日本の社会学 7 都市』
東京大学出版会
1987年 鈴木広・倉沢進・秋元律郎編『都市化の社会学理論——シカゴ学派からの展開——』ミネルヴァ書房
1992年 鈴木広編『現代都市を解説する』ミネルヴァ書房
1997年 鈴木広・木下謙治・三浦典子・豊田謙二編『まちを設計する——実践と思想——』九州大学出版会

【社会学説】

- 1985年 鈴木広・秋元律郎編『社会学群像』アカデミア出版会
1990年 鈴木広・徳永恂編『現代社会学群像』恒星社厚生閣

【監修者として】

- 2000年 鈴木広監修、嘉目克彦・三隅一人編『理論社会学の現在』ミネルヴァ書房
2000年 鈴木広監修、木下謙治・小川全夫編『家族・福祉社会学の現在』ミネルヴァ書房
2000年 鈴木広監修、木下謙治・篠原隆弘・三浦典子編『都市社会学の現在』ミネルヴァ書房

社会学概論のテキストの多くは、西日本地域の学会活動の延長線上に、学会員がそれぞれの研究分野の章を担当して執筆に加わり、教科書の印税は学会にも入る仕組みを考えられた。数多くの教科書の編集は、おそらく弟子たちの名前を知らしめる一つの方法として、教科書の編集を意図しておられたのではないかと思う。そして、このようなやり方は、多くの弟子を世に送り出された恩師の新明正道先生から学ばれたと思われる。

都市社会に関する論文集は、1981年に日本都市社会学会を設立したこととも関連して、日本全国の都市社会学者の参加を得て、共同編集の形がとられている。

社会学説を紹介するテキストは、『社会学群像』においては、古典的な社会学者(コント、スペンサー、シュタイン、マルクス、パレート、テンニース、デュルケム、ジンメル、ウェーバー、マンハイム、シカゴ学派、マッキーバー、ネオ・フロイディアン、クーリー、ミード、パーソンズ、マートン、ミルズ)を取り上げ、その後活躍した社会学者については『現代社会学群像』に収録されている。

テキストの出版は、出版社の協力が不可欠で、鈴木先生が関われた出版社は、当初、もっぱら誠信書房であったが、新しくアカデミア出版会が創設され、出版社に協力する形でアカデミア出版会との付き合いが多くなった。その後、諸般の事情で、ミネルヴァ書房と恒星社厚生閣に出版をお願いすることが多くなったようである。

4.3 論文の内容にかかわる特徴

さらに、鈴木先生が執筆された論文として特徴的なことは、問題意識をまず提示しておくという、「序説」というタイトルの論文が目立つ。先生は、新しいアイデアが出てくると、まず「序説」として一言述べておき、その後、その論点を深く考察していくというスタイルをとっておられたように思われる。そして、それをもとに実証的研究が進められることが多い。調査研究を進めていく中でも、調査結果を分析していく中でも、さらなるアイデアが生まれれば、それが新たな序説として提示されていく。そのようなたゆまぬ循環が研究スタイルとなっているように思われる。

4.4 多彩な共同研究

東北大学において、新明正道先生を中心に行われた共同地域調査に参加した経験から鈴木先生は研究組織を作ったり、共同研究に参加してこられた。

九州大学内における共同研究もあるが、大学外の研究者と研究組織を作って共同研究を進められた。鈴木先生の研究経歴上、最も重要と思われる研究組織は、1968(昭和43)年

に組織された「社会移動研究会（CMM 研究会）」であろう。CMM は、コミュニティ・モラルと社会移動の略語で、この名称は、全国的に著名になっていた SSM（階層と社会移動）調査の向こうを張るつもりでつけられたものである。SSM 調査が階層移動に焦点をおいているのに対して、CMM 調査は、階層移動と地域移動を関連付けた社会移動を念頭に置いてのことである。

表 2 は「社会移動研究会」の動向を示したものである。

表 2 社会移動研究会（CMM 研究会）

1969 年度 科学研究費 試験研究 取得（64 万円）

1971 年 10 月 社会移動研究会発足

鈴木広、船津衛、千石好郎、篠原隆弘、小川全夫、三浦典子、羽江忠彦

* 安田三郎 1971 年『社会移動の研究』東京大学出版会の合評会

その後

長谷川恒（九州経済調査協会）、木下謙治、松下武志、内藤考至、山口弘光、金子勇、

坂岡庸子、井上寛、米沢和彦らが参加

* 科学研究費 「社会移動の効果に関する社会学的研究」

1975 年 11 月 CMM 調査票作成

鈴木広、三浦典子、山口弘光、金子勇

1977 年 科学研究費 研究成果刊行費取得

1978 年 『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』アカデミア出版会

定価 13,000 円

* 上記太字は、『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』の執筆者

社会移動研究会のメンバーは、主に、九州大学で学んだものと東北大学の後輩で、

鈴木広のヒューマンネットワークによって構成されている。

社会移動研究会の研究活動において、最も強烈に記憶に残っている出来事は、大野城市調査に先立って、数名の研究会メンバーで、事前の概況調査のために大野城市に出かけた時のことである。二日市に住んでいた山口弘光君の尽力で、大宰府にある「戒壇院」で精進料理をご馳走になることになった。寺院に到着して、お寺や周囲のたたずまいを鑑賞しながら食事をいただく部屋に通され、料理のお膳を前に一同が座ったところ、鈴木先生から、「今回の調査にあたって各自の仮説を提示するように」との発言があった。突然のことで、一同啞然として押し黙っていると、「仮説がないなら調査をしても無駄だから、調査はやめた」と言われた。「科研費もいただいていることだし、やめるとするのは……」と言ったところ、「研究費は返せば済む」と。私は、なんとか仮説らしきものを述べたが、せっかくの精進料理をおいしく味わうことはできなかった。

先生は、研究会のメンバーが、先生のもとで、先生の期待に沿うようにと行動することに

不満を持っておられた。研究会は、メンバーは対等に共同で協力しあって研究することが本来の姿で、先生の音頭のもとと一緒に行動することではないと考えられておられたのではないかと思います。

社会移動研究会以外にも、先生は、日本都市社会学会の設立を契機として、各地の都市社会学者と研究交流したり、福岡の地にある財団法人九州経済調査協会、西日本新聞情報処理センター調査部、福岡県地域福祉振興基金会（現 財団法人福岡県地域福祉振興財団）との共同研究を数多く行われているが、先生自らはそれらの調査研究のチャンスを自分の中に取り込んで、自らの研究を膨らませてこられたといえよう。

そして先生は、共同研究者にも、そのような研究態度を期待されていたに違いない。

4.5 実証研究を支えた研究費

調査研究には、多額の研究経費が必要となるが、そのほとんどが、文部省、文部科学省の科学研究費の助成によっている。

鈴木広の社会学のターニングポイントとなる「大川調査」や「創価学会調査」は、社会学研究室で取得した科学研究費の分担研究者として進められたが、1968（昭和43）年に、社会移動研究会を組織して以降は、研究代表者として科学研究費を取得して研究が進められていった。

筆者が、助手に就任した当時は、科学研究費の経費の執行は、大学の経理担当部が行うのではなく、研究者自らが行うことになっており、その実務は助手の仕事となった。筆者が昭和44年に助手に就任してからの最大の仕事が、鈴木先生が取得された文部省の科学研究費「試験研究」の会計実務であった。その研究費の総額は64万円であった。「試験研究」は、実質的な調査研究を始める前の、共同研究者の研究打ち合わせが主たる研究目的であった。

話は本論からそれるが、まず、研究費が振り込まれる預金通帳を作成することからその仕事は始まった。「鈴木」の印鑑と通帳を作るための頭金をいただき、銀行口座を作りに行った。研究の進展と経費の使用が並行して行われていることが監査の対象となることから、研究会が開催される直前に、参加する先生方の出張旅費を計算し、その総計額を預金口座から下ろし、研究会の場で渡さなければならなかった。当時、教授、助教授によって日当と宿泊費が異なっており、時刻表をみながら旅行距離から鉄道運賃の旅費を計算し、宿泊費と日当を加えてそれぞれの先生方の出張旅費を計算した。当時、四則を計算する卓上計算機はまだ開発途上で、すべての計算は、算盤か手計算で行った。おかげで、筆者は出張旅費の計算はベテランとなり、計算能力も向上していった。

ちょうどこの研究期間中に、四則の計算ができる卓上計算機が発売されることとなった。この卓上計算機が出現する前は、アンケート調査後のパーセントの計算などは、手回しの計算機か手計算で行っており、調査後の集計作業は多くの時間を要していた。卓上とはいえ、大きな計算機ではあったが、パーセントが直ちに計算できるので、発売とともにカシオ製とシャープ製の卓上計算機を研究費で購入した。その計算機の費用は2台で20万円を超え、研

究費全体の3分1を費やしたが、調査研究前の準備としては、研究会の開催以上に有益であったと思う。

科学研究費の取得は、連続して毎年ということは難しいが、継続して申請書を出し続けることが研究費の取得につながると言われて、次年度以降、研究室で研究テーマや研究方法などを考えて申請書類を作成するように言われた。現在のようにコピー機はなかったので、カーボン紙を何枚も挟んで、提出用の複数枚の書類の作成を行った。おかげで、筆者も科学研究費の申請書類の作成もベテランとなった。

『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』（アカデミア出版会）につながる、福岡県大野城市調査や熊本県人吉市調査なども、科学研究費を取得して実施され、その研究成果は、昭和53年度研究成果刊行助成費を取得して出版された。その他「大都市におけるコミュニティの可能性と現実性」（昭和58～60年度 総合研究A）、「日本都市の社会構造」（平成元・2・3年度 総合研究A）の調査研究が、科学研究費を取得して実施された。

1994（平成6）年、九州大学退職後、先生は久留米大学の教授として就任されたが、それ以降も、「都市環境パラダイム構築と市民参加」（平成7・8年 基盤研究A-1）は研究代表者として、「雲仙普賢岳災害地域住民の社会的適応過程」（平成7年）は、三隅不二先生が代表者で、その分担者として行われたものである。久留米大学に移られて以降、それまで鈴木広と名前を表記しておられたものを、おそらく戸籍上の表記である鈴木廣に変えておられる。

これらの科学研究費を得ての調査研究以外にも、県や市町村などの自治体から、住民意識調査の依頼が寄せられた。調査実施後の結果分析などは、助手や大学院生が協力してきたが、あまりの多さに閉口して「もう少しましな研究をされたら」と言ったところ、「自治体の調査に協力しておく、後日、調査に行ったときに気持ちよく協力してもらえるから」と反論された。筆者は、この自治体調査の協力からも、調査票の作成や調査データを素早く読み取る力は養えたと思う。先生は、依頼された地域調査の結果からも、住民の行動様式や意識の変化など、興味ある事実を引き出しておられる。

以上が、鈴木広の社会学の全体概要とその特徴である。



久留米大学の特任教授の身分を終えられるにあたって、福岡市のホテル日航で、2006年3月5日に「鈴木廣先生謝恩会」が開催された。謝恩会には、先生に教えを受けた数多くの研究者が、国内外の各地から集まって一堂に会した。先生は、坂口桂子さんのピアノ伴奏で、念願の歌を披露された。

その後も、先生は、久留米大学比較文化研究所客員教授として2013年3月まで、学生指導に当たられた。

5 鈴木社会学の継承

鈴木広の社会学を、鈴木先生から指導を受けたものがどのように継承したのかを確認するための研究報告会が、第124回日本社会分析学会例会の特別部会として、2012年12月22、23日に、久留米大学で開催された。この年は、鈴木先生が客員教授として久留米大学に在職された最後の年度である。特別部会のテーマは「鈴木社会学の継承と発展」であった。

第124回日本社会分析学会例会 特別部会「鈴木社会学の継承と発展」

司会 三隅一人（九州大学）

1. 「都市と地域の社会学」 篠原隆弘
2. 「流動型社会論の功罪」 三浦典子
3. 「コミュニティ研究にみる総合社会学の精神」 金子勇（北海道大学）
4. 「鈴木社会学と宗教」 谷富夫（甲南大学）
5. 「台湾における地域福祉推進のための実践方法の課題——コミュニティ・ワークからコミュニティ・ソーシャル・ワークへの転換の必要性と方向性——」 莊秀美（台湾 東吳大學）

研究報告の後に、鈴木先生から全体的なコメントをいただいた。その折の報告内容の詳細は、『社会分析』（日本社会分析学会）No.41、2014年、に掲載されているので、学会誌を参照してほしい¹⁰⁾。

「特別部会」の登壇者以外にも、鈴木社会学を継承しているものは数多くいることは言うまでもない。先生は、G. ジンメル「現金の遺産」ということをよく述べておられた。遺産は誰かがすべて受け継ぐのではなく、各自がそれぞれバラバラに、ほしいところをもっていつか受け継ぐことを望んでおられた。

鈴木広先生から継承した財産をどのように発展させるかは、鈴木広から教えを受けたものの自由である。先生は、近代化とともに管理社会化が浸透していく中で、利己的な「自由」ではなく、自発的な「自由」意志によって形成される人間関係の中に、共同生活のあるべき姿を見出そうと努められてきた。それこそが「社会学」が対象とすべき、「社会」の根幹に関っていることを、理論的にも、実践的にも、常に考え続けられていたように思う。

「鈴木広の社会学 その1」では、とりあえず鈴木社会学の概要と、研究業績を3つの研究時期に分けて、その特徴と概略を述べた。鈴木広の社会学の実質的な考察は、「鈴木広の

社会学 その 2」以降、詳細に検討していきたいと考えている。時期区分を行ったものの、研究実績は時代を超えて積み重ねられていくものであることは、言うまでもない事実である。

[注]

- 1) 三浦典子「内藤莞爾の社会学 その 1—社会調査への誘い—」『やまぐち地域社会研究』（山口地域社会学会）15号、2018年、1-16頁、「内藤莞爾の社会学 その 2—村落調査から末子相続調査へ—」『やまぐち地域社会研究』16号、2019年、1-12頁、「内藤莞爾の社会学 その 3—社会学的末子相続の研究—」『やまぐち地域社会研究』17号、2020年、1-14頁、および「内藤莞爾の社会学 その 4—総括：内藤社会学に通底する比較宗教社会論—」『やまぐち地域社会研究』18号、2021年、1-16頁。
- 2) 鈴木広・林雅孝・土居平・千石好郎・木下謙治「零細企業型都市の社会分析」『社会学評論』13巻1号、1962年、59頁。
- 3) 社会分析研究会、1965年「はしがき」『社会学—基礎理論と分析—』誠信書房、ii頁。
- 4) 社会分析研究会、1967年「はじめに」『現代社会学講義』誠信書房、i頁。
- 5) 九州大学社会学研究室で学生たちが作成した『プロフィール』（1979年）より。
- 6) 日本社会分析学会の会長は、その後、山口大学の教授であった筆者が引きつぎ、現在は、九州大学三隅一人教授が就任している。
- 7) 対馬貞夫・田原音和・鈴木広、1985年「総合への意志」菅野正編『新明社会とその周辺』（東北社会学研究会）368頁。
- 8) 写真は、決起大会散会（イールズ事件関係）/ 昭和 25 年(1950)5 月 4 日
（イールズ事件関係写真より）データ No.D09-1-C009523、
東北大学史料館 > 東北大学関係写真データベース <http://webdb3.museum.tohoku.ac.jp/tua-photo/>
- 9) 鈴木廣、2007年「社会学 50 年の総括と展望（その 2）」『久留米大学文学部紀要 情報社会学科編』第 3 号、12 頁。
- 10) 特別企画：鈴木社会学の継承と発展、稲月正「解題 鈴木社会学の継承と発展」、谷富夫「鈴木社会学と創価学会」、三浦典子「流動型社会論の功罪」、金子勇「総合社会学による都市的世界—鈴木社会学から学んだこと」、篠原隆弘「都市と地域の社会学」、荘秀美「台湾における地域福祉推進のためのコミュニティ・ワークという実践方法の諸問題—コミュニティ・ソーシャル・ワークの考察を兼ねて」『社会分析』（日本社会分析学会）No.41、2014年、89-181頁。

三浦典子：山口大学名誉教授

E-mail アドレス：otani@yamaguchi-u.ac.jp